

JES NEWS

日本評価学会学会報 第2号

2022年1月31日発行

【編集】日本評価学会出版・広報委員会

【発行責任者】南島和久

連絡先: jes.info@evaluationjp.org

Contents

I 学会報を広く情報共有の場に	石田 洋子	・1
II 第22回全国大会の報告	田中 啓 齊藤 貴浩	・2
III 第76回理事会・総会報告	南島 和久	・3
IV 第29期評価士養成講座について	研修委員会	・4
V 書籍の紹介	新藤 健太	・5
VI 評価の実践	田島 明子	・6
VII 編集後記	湯浅 孝康	・7

I 学会報を広く情報共有の場に

日本評価学会副会長 石田 洋子(広島大学)

あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願
いします。新年早々に「日本評価学会学会報(ニュース
レター)」の第2号が発行されました。嬉しい限りで
す。出版・広報委員会の皆様のご尽力に心よりお礼申し
上げます。第2号では、本学会の副会長と国際交流委
員会委員長を務めます私が巻頭言を書かせていただく
ことになりました。第1号の巻頭言では、大島会長がご
自身と評価学会の関わりについて書かれています。私
もこれまでの評価や本学会との関わりを振り返り、今後
の期待をお話したいと思います。

日本評価学会は2000年9月に設立されました。昨年
2020年は学会設立20周年に当たりましたが、新型コロナ
ウイルス感染拡大のため、記念行事を行う機会には
恵まれませんでした。遡って学会設立10周年の2010年
には、記念行事として各学会員の評価とのかかわりに
関する原稿を取り纏めた「評価活動要覧: 評価と私」¹を
発刊しました。その要覧に、私は「私と評価: 評価する側
の経験と評価される側の経験」というタイトルで寄稿して
います。

その文章にも書いている
のですが、私は、1993年に
JICA 技術協カプロジェクト
に対する事後評価にコンサル
タントとして参加して以来、
外務省と JICA による ODA
評価のほか、日本赤十字社、
練馬区役所、NGO/NPO 等、
様々な機関による評価に携わってきました。



そもそも、1992年から1994年にかけて財団法人国際
開発高等教育機構(FASID)²のプロジェクトサイクルマ
ネジメント(PCM)手法研修に参加したことが、私が評価
に関わるきっかけです。当時はドイツ人コンサルタントが
講師を務めており、中でも上級(講師養成)コースで行
われたロールプレイによる実践を通じたファシリテーシ
ョン方法に関する講義から多くを学びました。この講義よ
り前、私はファシリテーションという用語を知らなかつた
こともあり、この講義で教わったことは、私が国際協カコ
ンサルタントとして技術協カプロジェクトや評価チームの

リーダーを務める際の基盤になりました。

この要覧では、私は途上国における技術協力の現場に携わるプロジェクト・チームのメンバーとして、評価される側となった自らの経験に基づいて「評価に対する想い」を書きました。ODA 評価は、評価する側(評価実施機関、評価チーム)、評価される側(ODA プロジェクト・チーム)、そして相手国の行政官や受益者にとっての学びの場です。しかし、多くの場合、評価する側の、評価する側による、評価する側のための評価となっています。多くの場合、評価される側や相手国の行政官や受益者には情報提供者としての役割のみが与えられ、評価から学ぶことは難しいのが現状です。こうした状況は、評価を行って説明責任を遂行するという目的には適っていますが、評価が誰の学びにつながり、どう役立っているかの問いに応えることはできていないと指摘しました。

現在、ODA 事業をより効果的・効率的に行う上で評価を役立てるための議論が外務省や JICA で行われています。評価の研究者や実践者の間では、「社会イノベーションなど、目的が固定されているというよりも目的自体が変化し、時間軸も予め設定されているというよりも

流動的で漸進的な対象を評価するための評価のやり方である『発展的評価(Developmental Evaluation)』を通して、外部への説明責任というよりも、イノベーションや変化から学習しようという評価アプローチ」が議論されています。また、ステークホルダーが協力して評価を行うことによって、評価における相互理解による自発的な意思決定を推進し、そこから得られる学びを実践に有意義に役立てることを目指す協働評価(Collaborative Evaluation)のアプローチも検討されています。

これらの議論には日本評価学会員が多く参加されています。私も、10 年来の課題解決につながるのではないかと注目しています。本学会報が、こうした国内外で展開される理論や実践に関する情報共有の場として活用されることを心から願っております。

注記

- 1 http://evaluationjp.org/files/Vol10_No3directory.pdf
- 2 現在の一般財団法人国際開発機構(FASID)

II 第 22 回全国大会の報告

第 22 回全国大会実行委員長 田中 啓 (静岡文化芸術大学)
企画委員長 齊藤 貴浩 (大阪大学)

日本評価学会第 22 回全国大会が 2021 年 12 月 4 日(土)・5 日(日)の 2 日間にわたり開催されました。まずは、大会の開催にご協力頂きました学会員の皆様、当日ご発表された方々、大会にご参加頂いた皆様に深くお礼を申し上げます。

今大会は、新型コロナウイルスの影響により、昨年に引き続きオンライン開催となりました。さらに、Peatix(ピーティクス)というイベント運営サービスを新たに導入して、ネット上で参加申し込みの受付を行いました。その結果、250 名(うち 179 名が会員)の方にご参加頂き、大

会の 2 日間にわたり、どの時間帯においても 100 名以上の方が常時セッションに参加され、盛会となりました。一方で、すべての手続きをネット経由で行ったため、事前の参加申し込みの登録や大会当日のセッションへのご参加について一部にご不便があったことについて、深くお詫び申し上げます。

大会のテーマは、コロナ禍をはじめ混迷する現代の様相を踏まえて「不確実性の時代の評価」としました。このテーマの下、シンポジウムを皮切りに、共通論題セッション(10 セッション)と自由論題セッション(4 セッション)が

開催されました。

冒頭のシンポジウムは企画委員会が企画を担当し、「『評価』に何ができて、何ができていないのか？ ～不確実性の時代への展望のために～」というテーマに基づき、これまで日本における評価の研究・実践と本学会の発展に対して多大なご貢献をされてきた塚本壽雄会員と廣野良吉会員の両氏にご講演頂きました。その後の各セッションも、各分科会や会員の皆様のご尽力により、多様なテーマのものが企画され、当日の発表や討論も充実した内容になりました。オンラインで開催されたことにより、2日目の最後のセッションまで多くの方にご参加頂けたことも、今大会の特徴として付け加えておきます。

なお、今大会から全国大会の実施体制が刷新されま

した。従来、大会プログラムの策定を担当していたプログラム委員会に代わり、今大会では企画委員会がプログラム作成をはじめとする大会全体の企画面を担い、大会実行委員会が運営面を担当するという役割分担の下で実施しました。企画委員会のメンバーの方には大会実行委員も兼ねて頂いたため、大変多くの作業に対応して頂きました。大会実行委員会に加わって頂いたその他の方々を含めて、ご協力に対して深く感謝いたします。

次回の全国大会は東京都清瀬市にある日本社会事業大学で開催されることになりました。新型コロナウイルスに関する今後の動向が気になるところですが、今回は久しぶりに対面で皆様にお目にかかれることを楽しみにしております。

Ⅲ 第76回理事会・総会報告

事務局長 南島和久 (龍谷大学)

2021年12月4日(土)に第76回理事会が開催され、以下の審議事項について議論を交わしました。審議事項はすべて承認されました。また、翌日の12月5日(日)に総会が開催され、前日の理事会で審議した2020/2021年度事業報告および活動計算書(案)について、2021/2022年年度事業計画および活動予算書(案)についての2つの議案についてご承認をいただきました。

審議事項：新規会員候補者の承認について、2020/2021年度事業報告および活動計算書(案)について(総会審議案)、2021/2022年年度事業計画および活動予算書(案)について(総会審議案)、学会賞受賞者(案)について、OECD/DAC新評価基準ガイダンスの和訳監修について、国際開発センターへの委託業務について

報告事項：退会者について、基盤整備検討会および中間まとめについて、次期役員選挙について、委員会報告(①編集委員会、②出版・広報委員会、③企画委員会、④国際交流委員会、⑤学会賞審査・倫理委員会、⑥研修委員会)、その他

IV 第29期評価士養成講座について

研修委員長 今田克司((一財)CSO ネットワーク)

第27期(昨年2-3月)よりオンデマンド&オンライン方式にシフトした評価士養成講座は、今回の第29期で3回目になります。評価にまつわる世の中の動きの中で、本講座の受講希望者の数も増え、関心層も広がっています。日本評価学会では、このような背景のもと、講座を継続していくとともに、講座内容や評価士制度を更新して社会のニーズに的確に答えていくことを検討中です。なお、第29期は1月20日の募集開始とともに満席となりました。次回の受講をお待ちしております。

■開催概要

◇講座 2022年2月19日(土)~3月13日(日)

①オリエンテーション(Zoom) 2022年2月19日(土)14:00-15:00

②講義録画の視聴 2022年2月19日(土)~3月20日(日)(期間限定、認定試験日まで視聴可)

③演習・質疑応答オンラインセッション(Zoom)への参加(2022年2月26、27日、3月5、6、12、13日)

◇評価士認定試験 2022年3月20日(日)(会場での実施、講座修了者のうち希望者のみ)

『第29期評価士養成講座』プログラム					
単元	講義名	講師名	演習・質疑応答オンラインセッション日時		
	オリエンテーション、自己紹介	事務局	2/19	土	14:00-15:00
第1単元 講座の概要 と評価の基礎	① 講座の概要 評価の基本的考え方(1) 評価者倫理と評価者の社会的責任	今田克司	2/26	土	09:00-10:00
	② 評価の基本的考え方(2)	津富宏	2/26	土	10:15-11:15
第2単元 プログラム 評価の基礎 と諸要素	③ プログラム評価の基礎と概要	大島巖	2/26	土	11:30-12:30
	④ プログラム評価の5階層 (ニーズ評価からセオリー評価)	源由理子	2/27	日	09:00-10:30 演習(グループ①) 10:45-12:15 演習(グループ②) 12:30-13:30 質疑応答(合同)
	⑤ プログラム評価の5階層 (セオリー評価からプロセス評価)	新藤健太	3/5	土	09:00-10:00
	⑥ プログラム評価の5階層 (インパクト評価)	青柳恵太郎	3/5	土	10:15-11:45
	⑦ プログラム評価の5階層 (効率性評価)	齊藤貴浩	3/5	土	12:00-13:00
第3単元	⑧ 業績測定	小野達也	3/5	土	14:00-15:00
第4単元 分析手法	⑨ データ収集・分析(定量的手法)	佐々木亮	3/6	日	09:00-10:30 演習
	⑩ データ収集・分析(定性的手法)	三好崇弘	3/6	日	11:00-12:30 演習
第5単元	⑪ 評価報告と活用	源由理子	3/6	日	13:30-14:30
第6単元 専門分野 科目	⑫ 日本の評価の現状レビュー	山谷清志	3/12	土	09:00-9:45
	⑬ 大学評価の現状と課題	齊藤貴浩	3/12	土	10:00-10:45
	⑭ ODA 評価の現状と課題	柳内将成	3/12	土	11:00-11:45
	⑮ 政府における政策評価の現状と課題	塚本壽雄	3/12	土	12:00-12:45
	⑯ 学校評価の現状と課題	橋本昭彦	3/13	日	09:00-9:45
	⑰ NPO 評価の現状と課題	小林立明	3/13	日	10:00-10:45
		講座のおさらい	今田克司	3/13	日
	事務局連絡	事務局	3/13	日	12:00-12:15

【第30期評価士養成講座のご案内】

第30期評価士養成講座は、2022年8~9月、開講を予定しております。

評価士養成講座ウェブサイト <http://evaluationjp.org/activity/training-pro.html>

V 書籍の紹介

大島巖・源由理子・山野則子・費川信幸・新藤健太・平岡公一著『実践家参画型エンパワメント評価の理論と方法～CD-TEP法：協働によるEBP効果モデルの構築』（日本評論社、2019年）

新藤 健太(群馬医療福祉大学)

はじめに、本稿は、執筆者のひとりとして、本書出版に込められた意図を含めた紹介文であることをご了承ください。

本書は、様々な社会問題・福祉課題の解決を適切かつ効果的に行うための、社会プログラムの効果モデル構築に資する評価アプローチ法を提案したものである。本書のなかではその具体的な方法として「プログラム理論・エビデンス・実践間の円環的対話による効果的プログラムモデル形成のためのアプローチ法(CD-TEP法)」を紹介している。

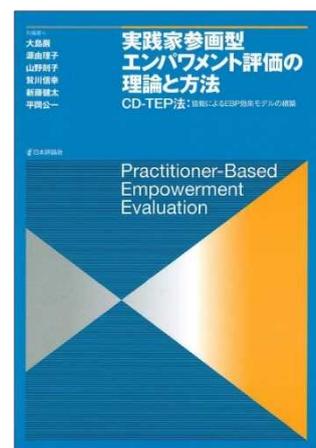
CD-TEP法は、新しく導入される対人サービスの実践プログラム、あるいは十分な成果が上げられていない既存プログラムを、プログラムに関わる実践家や利用者など関係者の参加と協力を得て、より効果的で有用性の高いプログラムモデル(効果モデル)へと発展させるために行う、実践に根ざした《ボトムアップ型》の評価方法であり、社会福祉やソーシャルワークの領域をはじめ様々な分野から高い関心を得ている。

本書は5部から成る。第I部「総論：目指すもの、社会的背景・意義、アプローチの特徴」では、実践家参画型エンパワメント評価やEBP効果モデルの形成・発展、実践家と評価者の役割・評価支援の仕組みづくりについて解説している。第II部「評価手法：実践家参画型エンパワメント評価の実施方法」では、実践家参画型エンパワメント評価の具体的な方法論としてCD-TEP法を取り上げ、その概要を解説している。第III部「効果モデル形成・発展ステージに対応した評価活動」では、CD-TEP法の具体的な進め方を、評価計画の設計、新たなプログラムモデルの開発のための評価活動(設計・開発評

価ステージの取組み)、プログラムモデルの継続的改善のための評価活動(形成・改善評価ステージの取組み)、そして、プログラムモデルの実施・普及のための評価活動(実施・普及評価ステージ)から詳細に解説している。第IV部「効

果モデル形成・発展ステージ・横断的な活動と体制整備」では、CD-TEP法の中核的な取組みである実践家参画型ワークショップやGP(Good Practice)事例調査、試行評価プロジェクトについて、また質的・量的データ分析の方法や実践家の評価キャパシティ形成、評価の実施体制・支援体制の構築について解説している。最後に第V部「社会的意義・成果と課題・展望」では、実践家参画型エンパワメント評価(CD-TEP法)の社会的な意義等について考察している。

山積する社会課題の解決に向けて効果的なプログラムの開発やその実施・普及が求められている。近年のEBPMや社会的インパクト評価の動向もこうした効果的なプログラムモデル開発へのニーズをより一層強化しているものと思われる。今後、必要になるのはそのための有効な方法論であり、そのひとつとして本書が多くの人々のもとに届き、活用されることを望みたい。また本書を手にとっていただき、関心をもっていただいた方々との協働・議論を重ね、実践家参画型エンパワメント評価(CD-TEP法)のより良い発展も図っていきたい。



VI 評価の実践:「作業療法の現代史から浮かぶ評価の多様性と可能性」

田島 明子(湘南医療大学)

湘南医療大学に勤務しています田島明子と申します。作業療法士という医療職をしております。私は 2019 年に評価士養成講座を受講し、日本評価学会認定評価士の資格認定をいただきました。諸先生方、ともに受講した皆様に大変お世話になりましたことをこの場を借りて御礼申し上げます。

さて、そもそも私が評価士養成講座を受講しようと思いついたのは、地域において高齢者が主体で行う住民運営の通いの場(老人憩いのサロン)に作業療法士として関与した際の、介護予防機能としての効果を評価するための評価法開発をしたいと考えてのことでした。

考えてみますと、評価というものは、遡ると義務教育時代、医療職としての養成校時代から実際の臨床現場、現職である大学においても切っても切り離せないものです。私自身が受けた教育のなかでは、一定の知識・技術の教授があり、それに対しての到達基準に照らした合否の判断材料として評価されることが大変多かったと記憶しています。残念ながら、あまり良い思い出がないため、人の能力や価値を判断する根拠を探すものが評価という少しネガティブなイメージが定着していました。

作業療法士になるための養成校に入学すると、さらに評価が大きな存在になりました。ただ、ここでの評価は、これまでの学校教育のなかで私自身が経験した評価の意味とは少し異なるものでありました。つまり、評価は、患者の状態を把握し、適切な医療行為に結びつけるための情報獲得手段であるというものです。ただし作業療法が日本で始まった 1970 年前後の時代には、評価の何も定まっておらず、当時の作業療法士が評価について様々ディスカッションをしていたことが資料からわかります¹。たとえば、評価方法、評価内容、評価技術についてです。なぜなら、それらが治療範囲を確定し、治療

効果の測定に結びつくからです。つまり、作業療法のアイデンティティの確立と新参者である作業療法が医学など歴史ある医療から承認を得るためにその効果を示す必要に迫られてのことでした。

作業療法についてご存知ない方も多いと思いますので少し説明を加えますと、日本では 1965 年に国家資格化をしており、現在では 10 万人近い有資格者が医療機関や介護保険施設等で働いています。Occupational Therapy を日本語訳したもので、Occupy(時間を占有する)が非常に重要な意味を持っています。「作業」とは人の行う全ての行為であり、生まれてから死ぬまでの時間を占有する「したい作業・必要な作業」の積み重ねに、その人らしさがあると作業療法では捉えます。ですから、作業療法は「作業」の可能化を目指すのですが、その背景には、その人らしさを育むという重要なテーマがあります。

現在までの作業療法の発展史のなかで、作業療法の目的や介入の視点は大きく変化しました。以前は、食事や入浴などの日常生活活動が自立して行えることが重要な目的だったため、評価内容も客観的な指標を持つものでしたが、近年は、患者にとって満足した暮らしかどうか重視されているため、主観的な状況がわかる評価方法が様々開発されています。このことは医療の根拠となる科学の在り方の変化も物語っています。ですので、評価の在り方は世界を変えるに等しいのだと思っています。

最後に現在行っている研究と評価の課題を紹介し、療法士を対象とした『「障害の社会モデル」を重視したリハビリテーションのための内省型研修プログラム開発』をしたいと思っています。従来のリハビリテーションは対象者個人の生活能力に注目した「障害の個人モデル」に立脚しているのに対して、障害は、社会が障害の

ある人にもたらす不利益と捉え、療法士自身が自らの視点の課題に気づきを得ながら、障害の肯定性と社会の多様性を重視したリハビリテーションに変容することを目指した研修です。研修プログラムのなかで、自身を内省し、気づきを得て、自身のリハビリテーションを変え、その効果がどのようなものであるかについての評価システムが開発できるとよいと思っています。また、研修プログラム自体のプロセス、アウトカムの評価法の開発も必要になると思います。評価士養成講座で学んだことを振り返りつつ、諸先生方に教えを頂きながら、研究を進めたいと思っております。

注記

- 1 田島明子(2013)『日本における作業療法の現代史—対象者の「存在を肯定する」作業療法学の構築に向けて—』生活書院



VII 編集後記

出版・広報委員会委員 湯浅 孝康(大阪国際大学)

日本評価学会報(ニューズレター)第2号をお届けします。第2号の内容は、副会長の石田先生からの巻頭言、第22回全国大会のご報告、第76回理事会・総会のご報告、第29期評価士養成講座の開催のお知らせ、新藤先生からの書籍のご紹介、田島先生による評価の実践例のご紹介でした。前号に引き続き、充実した内容で第2号をお届けすることができました。本号に原稿をお寄せいただきました皆様、お忙しいところご協力を賜り、誠にありがとうございました。

さて、みなさんもご存じのとおり、最近では「持続可能な開発目標(SDGs: Sustainable Development Goals)の理念が、あらゆる場面で盛んに説かれています。2015年9月に開催された国連サミットにおいて全会一致で採択されたSDGsは、「『誰一人取り残さない』持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現」を目標としています。

日本評価学会は、学問分野や立場が異なる多様な方々によって構成されています。価値観の違う会員同士が互いを認め合い、すべての会員と良い関係を築いてゆくことは、このSDGsの目標の実現に通じると言えます。自らとは異なる他者の考え方や活動を知ることは、その第一歩として重要です。この学会報(ニューズレター)が、会員同士の理解を促すツールの1つとなれば幸いです。

記事募集について

出版・広報委員会では学会報(ニューズレター)に掲載する記事を募集しています。

募集する記事は、「書籍の紹介」「評価の実践」「その他」です。学会報に掲載していただける記事がありましたら、出版・広報委員会までお寄せください。なお、掲載する記事は学会員の評価に関連する活動(原則として事後のもの)に限らせていただきます。イベントの告知やお知らせなどは学会報ではなくMLの方に掲載させていただきます。

学会報の発行は理事会後1ヶ月を目途といたします。次号の第3号の記事の締め切りは3月18日です。発行は4月を予定しております。ふるってのご応募をお待ちしております。

出版・広報委員会